

昭和58年度

かず  
一

ちょう

町

遺 跡

第6・7・8・9次発掘調査概報

1984

橿原市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市教育委員会が昭和58年度国庫補助事業（総額4,000,000円、補助率国50%、県25%）として計画し実施した「橿原市内所在遺跡の調査」の概要報告である。
- 2 昭和58年度は、初年度事業として「新沢一町弥生遺跡範囲確認調査」を実施した。
- 3 調査は、橿原市教育委員会事務局社会教育課文化財係が行った。うち、佐藤幸一、前田聖治が事務を、斎藤明彦、長谷川俊幸が現地調査を担当した。
- 4 調査にあたり、次の方々に所有地を提供していただいた。記して謝意を表します。  
（順不同） 橿原市中曾司町 今川政行氏、橿原市一町 竹村 勇氏、高市郡高取町越智 豊島房信氏、生駒郡斑鳩町興留 土田 勝氏
- 5 発掘調査及び遺物整理には、石橋尚樹・田仲伸王・秋山成人・鹿田裕彦・木村澄子・阿部郁代・岡橋朱實・砂田カヨコ氏らの参加を得た。
- 6 本書の作成は、斎藤・長谷川が行い目次にその文責を記した。

# 目 次

## I はじめに

- 1 調査契機と経過……………（長谷川） …… 1
- 2 研究史抄……………（長谷川） …… 2
- 3 遺跡の位置と環境……………（斎 藤） …… 2

## II 調査の概要

- 1 第7・9次調査（大石地区の調査）……………（斎 藤） …… 4
  - 1）遺 構……………（斎 藤） …… 5
  - 2）出土遺物……………（斎 藤） …… 6
- 2 第6次調査（前殿地区の調査）……………（長谷川） …… 8
- 3 第7次調査（ハスベ地区の調査）……………（長谷川） …… 9

- III ま と め ……………（斎 藤） …… 10

# I はじめに

## (1) 調査の契機と経過

橿原市一町所在の新沢一町遺跡は、大正年間から磯城郡田原本町唐古遺跡とともに学界に知られた弥生時代の遺跡であったが、近年では小規模な調査が行われるだけで、成果の公表が遅れがちなことであって学術的な研究が停滞ぎみであった。ところが、昭和57年度に一町遺跡東方尾根上の上ノ山遺跡が調査され、高地性集落としての性格の一端が明らかにされると、その対集落としての一町遺跡の重要性が再認識されることとなった。しかしながら行政調査の常として、まとまった開発がなければ調査が行いにくいという事情があり、開発待ちという状況になりがちである。この状況を打開するために、橿原市教育委員会では、「橿原市内遺跡発掘調査事業」を計画し、その初年度（昭和58年度）事業として新沢一町遺跡の範囲確認調査を実施した。これは積極的に遺跡の性格を追求することにより、学術資料の収集のみならず文化財行政を進めるうえでの資料を得ることを目的とするものである。

調査は2ヶ所3回行った。別に行った試掘調査を併せて、本書では3ヶ所計4回の調査の結果を報告する。

前殿地区では、対象地面積約70㎡、調査面積約12㎡である。調査後原状に復した。

大石地区では、対象地面積約840㎡で、調査面積約720㎡である。調査は2度に分けて行い弥生時代後期の溝跡と瓦質の柱をもつ近世の井戸跡を検出した。

ハスベ地区では、対象面積約1192㎡で、調査面積約60㎡である。調査後所有者により資材置場として利用される。

上記のうち前殿地区・ハスベ地区は長谷川が、大石地区を斎藤が担当し、それぞれが成果を報告する。

表1 新沢一町遺跡の調査一覧

	地 番	調 査 期 間	調 査 機 関	文 献
A	一町字タベ	1917. 8. 15 ~ 8. 16	奈良県	(1)
B	" "		奈良県	(6)
C	" "	1942. 8. 30 ~ 9. 4	奈良県教育委員会	(11)
D		1955. 11. 10 ~ 11. 20	奈良国立文化財研究所 奈良県立橿原考古学研究所	(12)
E	一町字前殿	1970. 5. 1 ~ 5. 31	橿原考古学研究所	(13)
F	" " 1374-1、4	1983. 7. 16 ~ 7. 23	橿原市教育委員会	
G	" 字大石 641-1~5	1983. 11. 5 ~ 12. 10	"	
H	" 字ハスベ948、949、950-1	1983. 12. 28 ~ 12. 29	"	
I	" 字大石 641-1~5	1983. 3. 1 ~ 3. 25	"	

## (2) 研究史抄

新沢一町遺跡は、大正6年(1917)鳥居龍蔵博士による実地踏査の結果が当時の新聞紙上に発表されて世に知られるところとなった。これが契機となり、奈良県史蹟名勝天然記念物調査会による調査が続けられ、大正7年(1918)高橋健自博士により、また昭和3年には吉田宇太郎氏によりそれぞれ発掘調査報告書が作成された。この間、考古学関係の雑誌にも当遺跡に関する論考が多く掲載されたがもっぱら遺物編が大勢を占めていたようである。この時にあって遺構の詳細を報じた吉田氏の報文は、少なからず問題提起をしたはずだが、未だ土器編年その他の方法論が当時の学界に成熟しておらず、吉田氏自身遺跡を語りつくしていない状況であった。

その後数次にわたって調査が行われたが、いずれも小規模で、また残念ながら成果報告が十分に為されておらず、研究者も次第に一町遺跡について語る事が少なくなっていき、現在に至っている。一町遺跡の付近には忌部山遺跡・上ノ山遺跡・本間丘遺跡という高地性集落が点在し、また新沢千塚古墳群が広がっており、一町遺跡単独の性格のみならず、この地における時間的空間的意義をも解明しなければならず、これからの調査の課題は大きく多い。

### 新沢一町遺跡関係文献

- (1) 高橋 健自 「高市郡新沢一石器時代遺跡」『奈良県史蹟勝地調査会報告 第10回』 奈良県 1918
- (2) 上田 三平 「高市郡新沢遺跡について」『歴史地理 第31巻2号』 日本歴史地理学会 1918
- (3) 岩田 武俊 「竹之内・新沢の遺跡遺物」『人類学雑誌 第36巻5号』 1918
- (4) 菅原教育会 「大和新沢石器時代遺物図集」 1924
- (5) 樋口 清之 「大和考古行脚(唐古、一、丹波市)」『中央史壇 第12巻3号』 1927
- (6) 吉田宇太郎 「高市郡新沢村大字一石器時代遺跡調査」『奈良県文化財調査報告 第10冊』  
奈良県教育委員会 1925
- (7) 直良 信夫 「新沢村一発見のスモモ核」『史前学雑誌 第1巻5号』 1929
- (8) 吉田宇太郎 「大和新沢村の石器時代遺跡の考察」『名所旧跡 第2巻3・4号』 1929
- (9) 小林 行雄 「新沢村一出土の一土器」『考古叢書 第1編41』 1931
- (10) 末永 雅雄 「大和の考古学遺跡(二)」『大和文化研究 第1巻2号』 大和文化研究会 1953
- (11) 島田 暁 「橿原市一町東常門弥生式遺跡」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報10』  
奈良県教育委員会 1956
- (12) 「埋蔵文化財発掘届一覧」『埋蔵文化財要覧二』 文化財保護委員会 1959
- (13) 石野 博信  
前園実知雄 「橿原市一町遺跡前殿地区の調査概要」『青陵No.17』 奈良県立橿原考古学研究所 1971
- (14) 網干 善教 「大和先史遺跡研究文献目録」『橿原(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告 第17冊)』  
奈良県教育委員会 1961

※ この資料により関係文献を抜き出し、その後に発表されたものを加えた。

## (3) 遺跡の位置と環境

一町遺跡は、橿原市一町東常門田部之台に位置し県下でも弥生時代の代表的な遺跡として知られている。遺跡は、曾我川右岸に立地し背後には貝吹山から西に張り出す丘陵が続き、ここには千塚古墳群が立地することでも知られており、近くには500号墳(茶臼山古墳)がある。

この古墳は、昭和37年に榎原考古学研究所が調査を実施し3基の粘土槨と1基の埴輪円筒棺をもつ全長約62mの前方後円墳として報告されている。また、500号墳から北へ300mには上ノ山遺跡が立地する。この遺跡は、榎原考古学研究所々員寺沢氏によって弥生時代後期の遺跡として紹介されており、昭和57年7月1日～10月4日まで榎原市水道局が給水・受水タンク設置のため榎原市教育委員会が事前調査を実施した。その結果、谷間に弥生時代後期の遺構・遺物が多数出土し奈良県下でも検出例が少ない高地性集落として位置づけられている。

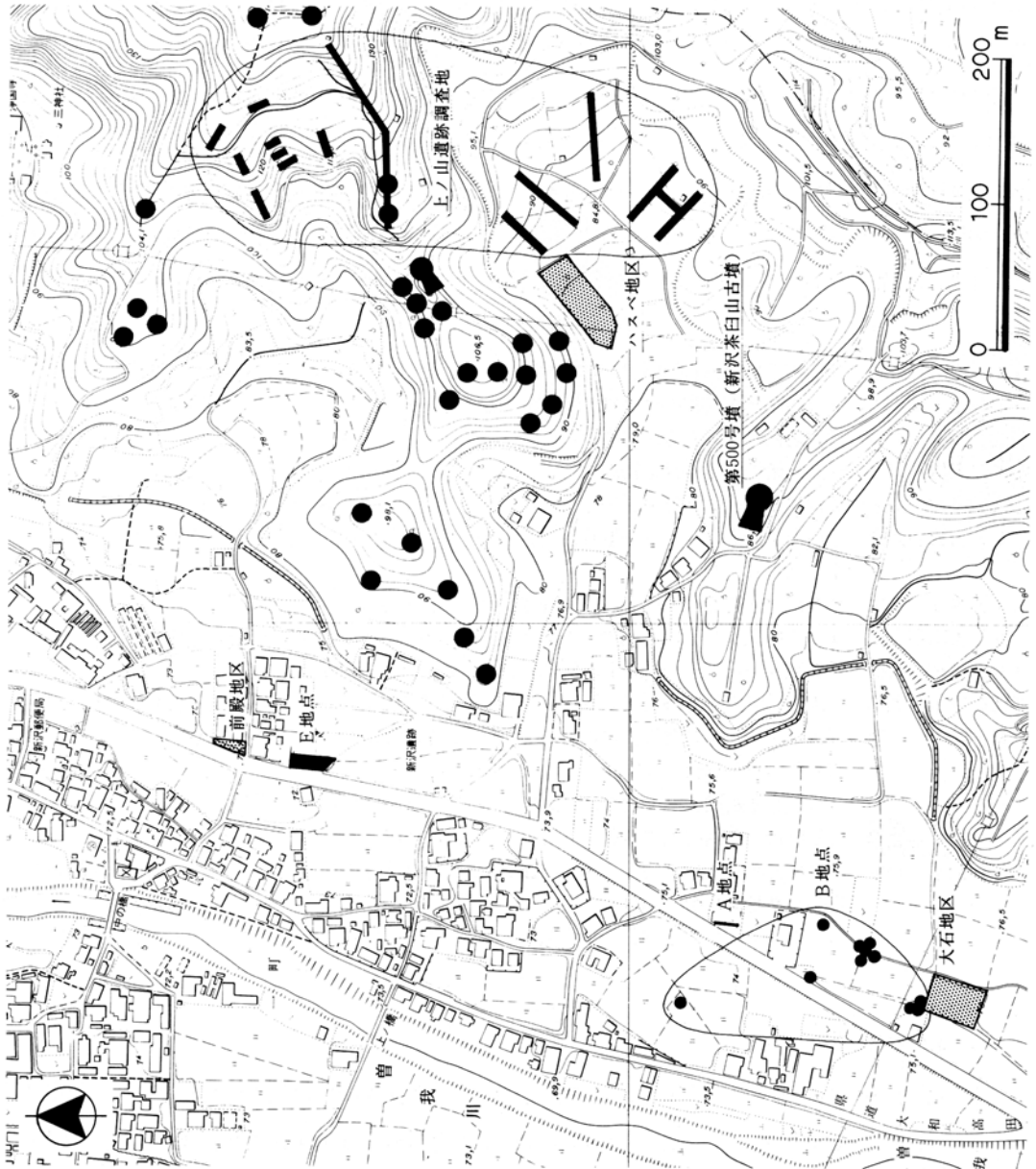


図1 調査地位置図（アルファベットは表1に対応）

## II 調査の概要

### (1) 第7・9次調査

調査地は、一町字大石の地名を残す地帯である。曾我川右岸に沿って旧村の中を走る県道大和高田・高取線と県道戸毛・久米線の合流点から東北へ約100mに位置する。第7次調査は、昭和58年11月5日～12月10日までの約1ヶ月間を要し、西側約360㎡を対象とする。第9次調査は、昭和59年3月1日～3月25日までの約1ヶ月間、東側約360㎡を調査した。現在の水田耕作土層下の床土の下に弥生土器の包含層（黄茶褐色砂質土）が堆積する。この包含層は調査地区南側では厚く、中央部から北側に向かってうすくなっている。とくに中央部から北側にかけて砂礫層が約50cm位堆積しており、北側端では約1.5mを計る。

発掘調査により検出した遺構は、7次調査において溝（SD-03）・土壇（SK-01）・井戸

（SE-01）・Pit、9次調査は7次調査で検出したSD-03の延長とみられる溝（SD-01）と瓦粘土採集のための土壇である。



写真1 調査区遠景

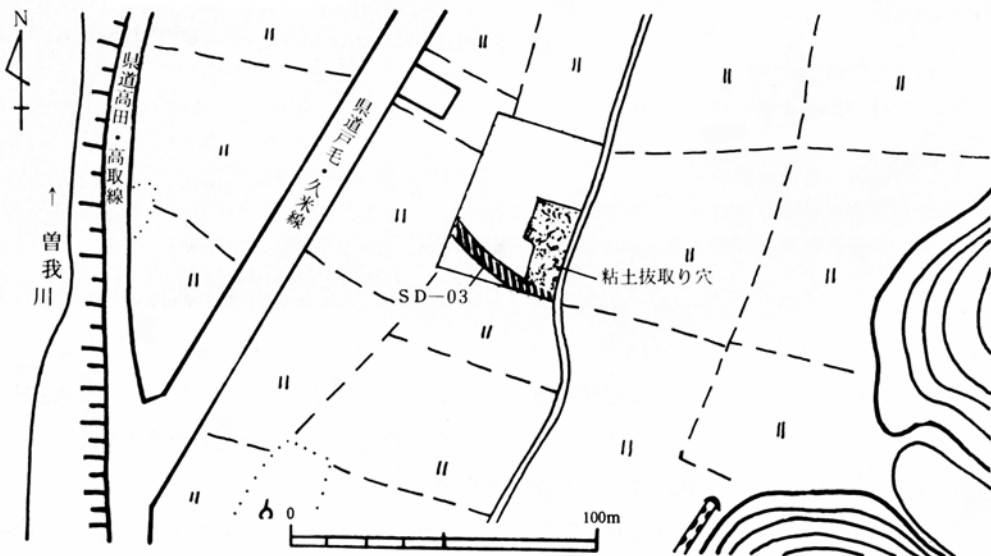


図2 調査区と検出遺構



写真2 S D-03遺物出土状況（7次）

溝底は東南端で52cm、北西端で61cmを計り東南の方が9cm高くなっている。溝の断面は「V」字状をなし、堆積はⅠ層（暗茶褐色粘質土）、Ⅱ層（赤茶褐色砂質土）、Ⅲ層（暗黄褐色砂質土）、Ⅳ層（暗灰色砂質土）と4期に区別することができる。しかし、土器の出土状態からみると、上層（Ⅰ・Ⅱ層）・下層（Ⅲ・Ⅳ層）と大きく2層に分けることができる。

遺物の出土状態（写真3）は上層よりコンテナで約50箱近くの土器が溝全体にかさなった状態で出土し、なかでも手焙型土器、赤色顔料が塗られた高杯が出土している。下層は上層にくらべ土器の出土量は少ないが、大型器台などが出土しているため上層より古い様相をもつと考えられる。

9次調査で検出した溝（S D-01）は、7次調査で検出した溝（S D-03）の延長で12m分を検出した。溝幅、深さなどはほとんど同一で土層もⅠ～Ⅳ層までに区別することができる。しかし、遺物の出土状態から上層・下層に区別することは困難である。遺物の出土量は少なくコンテナで約10箱を数え完型品はなく土器の断片が散在した状態で出土した。

次に調査区東側中央部で方形土壙を検出した。この土壙（図3）は、一辺約2～3m、深さ約30～50cmを計り、一ヶ所に集中し計画的に掘られたもので遺物は出土していない。この付近は、明治

## 遺構（図2）

S D-03（7次）・S D-01（9次）

7次調査で検出した溝（S D-03）は、調査区南側端で東南から北西に流れる弥生時代後期の溝状遺構で約16m分を検出した。北西に向かって次第に振れ弧状に延びる。溝幅は、調査区南側端中央部より溝の肩半分が入り込んでいるため東西南端は計測することができない。そのため現存する北西側で計った際、約1.2m、



写真3 S D-03遺物検出（7次）



写真4 S D-03完掘状況（7次）

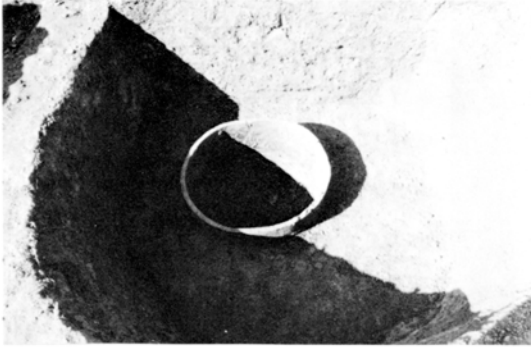


写真5 SE-01検出状況(7次)



写真6 調査風景(9次)



写真8 SD-01遺物検出状況(9次)

### 出土遺物(図3)

7次・9次調査の出土遺物はSD-03(7次)・SD-01(9次)の溝に集中し、弥生時代後期

末期～昭和初期にかけて瓦粘土の採集が盛んとなり、その時の瓦粘土抜き取り穴と思われる。

井戸は(写真5)、7次調査地区中央部西側端で検出され長径1.5m、短径1.2mの円形のプランをもつ井戸である。ほぼ垂直に掘り下げ深さは約1.5mを計り、底は平坦である。堆積は、Ⅰ層(暗茶褐色土)・Ⅱ層(暗茶褐色砂質土)・Ⅲ層(青灰色粘質土)と大きく3期に分けられる。底の部分には、方形に板状の木製品(5×20cm)を2重にひきつめその上に径98cm、高さ31cm、厚さ32cmの瓦質円筒を3段に積み上げた井戸枠が検出された。最下段の瓦質円筒の周囲には、井戸枠が動かないように長さ約60cm、径11cmの杭を四方向に打ち込み、かなり頑丈に固定されている。

遺物はほとんどなく、井戸枠内から江戸時代後期の陶器片が1点出土している。



写真7 遺物出土状況(9次)





写真9 遺構検出状況（9次）

の遺物が一括して出土している。土器以外には、調査区北側砂礫層から磨製石斧の断片と石包丁、石槍が出土している。

以下、実測できたものを簡略に報告する。

蓋（図3-1） 器高は5.1cm、口径14.8cm、つまみ径4.8cmで外面はへらみがき、内面は細かいハケが施されている。つまみ頂部は凹み、つまみ側面に指頭圧痕がみられる。

台付甕（図3-2） 器高22.7cm、口径15.4cm、体径17.3cm、底径8cmで内面は上部を荒い横ハケ、下部を縦方向のハケで施されている。外面は右上がりのタキが、口頸部は外面を横ナデ、内面をハケで調整されている。脚部は、内面を縦方向の荒いハケの上から横ハケ、外面は縦方向にハケ調整が施されている。

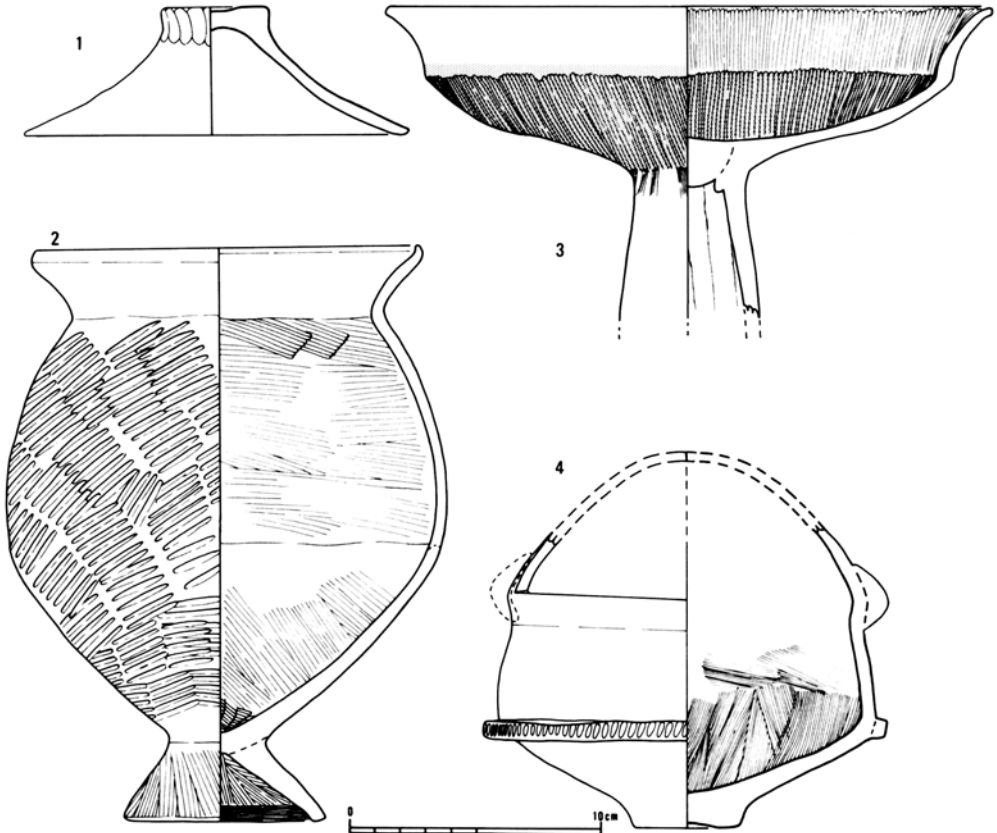


図3 SD-03遺物実測図

高杯（図3－3） 脚部半分が欠損する。現存高は12.5cm、口径24cmで内面は、縦方向のへらみがきが施されている。内外面（図アミ部分）には赤色顔料が塗られている。

手焙型土器（図3－4） 復元器高約15cm、口径13.8cmで下半部は、ゆるやかに内彎して伸び、屈曲して上半部は立ち上がる。屈曲部に突帯をもち、蔽部口縁下に耳をもつ。

## (2) 前殿地区の調査 (字前殿1374-1、4)

本地点は、県道戸毛・久米線沿いの狭少地である。県道敷設の際に掘削したとの見聞を得ていたが、1970年の調査で弥生時代後期の溝を検出した地点から北約50mに位置するので、範囲確認のため調査を実施した。トレンチは東西幅2m、南北長さ6mのものを設定した。その結果、弥生時代後期の土器細片を数点採集したのみで、包含層・遺構ともに発見できなかった。旧耕作土より上層を除けば、砂層・シルト層の不安定な土層が多く、遺構ベースとなるような層も、トレンチ



写真10 調査地(北から)



写真11 トレンチ全景



写真12 トレンチ東壁



図4 調査地周辺図(1:2500 上が北)

内では見られなかった。土層観察から、深くなるにつれ堆積が北へ傾斜する傾向があるので、谷状地形の肩付近にあたると思われる。したがって遺構・遺物が発見できないことも理解できる。ただし、一町遺跡は、東の貝吹山(標高210.25m)から伸びる尾根・谷と平野部との接点であるとともに、南北に流れる曾我川の河岸段丘でもある。地質的に複雑な部分に立地しているので、谷地形であることから遺構が存在しないと即断することは避けるべきだろう。この調査の結果が、遺跡の北限を決めるとは考えていない。

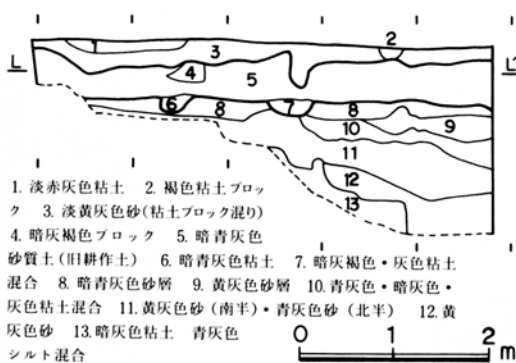


図5 トレンチ西壁断面図(L=71.0m)

### (3) ハスベ地区の調査

(字ハスベ948, 949, 950-1)

本地点は、尾根の南裾の谷地にある。北東に接する地点で、昭和57年度に上ノ山遺跡の調査が実施されたが、その際には遺構は発見されなかった。本地点では、一町遺跡の東端を探るべく調査を実施した。

今回は約1172㎡の対象地に、幅1mでL字形に掘削した。総延長約60mで、うち4ヶ所



写真13 調査地全景 (西から)



写真14 深掘り区A (東南から)



写真15 深掘り区B (西南から)

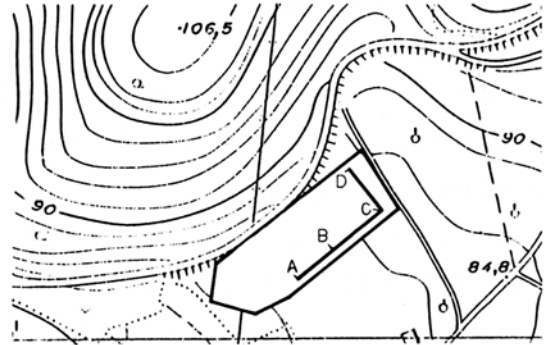


図6 調査地周辺図 (1:2500 上が北)

で探掘りした。その結果表土(1. 淡赤褐色砂質土)から瓦器碗細片数点が出土したのみで、他では遺物が全く発見されなかった。探掘り地点でも粘土が深く続くのみで、遺構も見られなかった。本地点周辺には弥生時代～古墳時代の遺跡が集中しているが、それらは尾根上が曾我川沿いに限られており、谷筋奥ではやはり遺構は発見されなかった。一町遺跡の南北の広がりはある程度知られているが、東西の広がりについては不明な点が多く今後も調査が必要だろう。(なおこの調査は国庫補助事業ではないが、便宜上本書に掲載した。)

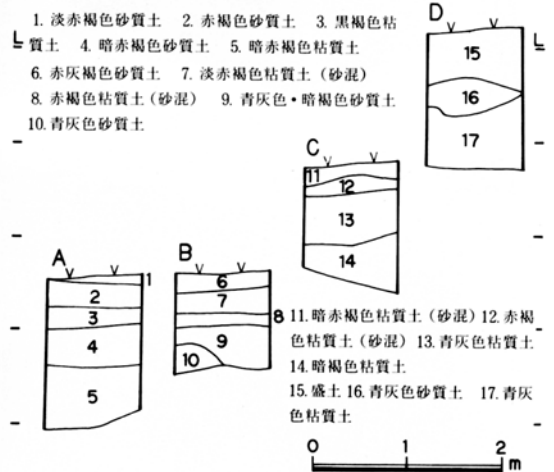


図7 基本土層図 (A～Dは図6に対応 L=88.0m)

### Ⅲ まとめ

以上、6次～9次調査の概要である。本概報ではまだ未製理の部分が多く詳しいことは記載しなかったが、最後に6次～9次調査の成果、課題を簡単に述べこの章をとじることとする。

6次・8次調査は、調査区が小面積のため満足な調査はできず遺構・遺物もほとんど検出されなかった。7次・9次調査は、総面積720㎡を調査し、弥生時代後期の溝状遺構、近世の井戸、瓦粘土抜き取り穴の痕跡にとどまった。遺物は、溝状遺構より多量の土器が出土し弥生時代後期でも若干の時間差があったと思われる。現在、遺物整理継続中のため詳しいことは次の機会にあらためて報告とする。この溝は、弥生時代後期の集落形成の中でなんらかの境界を意味するものか、たんに排水溝的な機能をもったものか今後に課題を残す点でもある。遺構は全体に南側へ集中し中央部から北側にかけてまったくみられなかった。これは、前述もしたが弥生土器の包含層が南側部分で顕著にみられるが北側では皆無でそのかわり砂礫層が厚く堆積している。この砂礫層を除去すると2～3mmの植物層、その下から暗青灰色粘土層が確察でき北側に大きな落ち込みがあると思われる。吉田宇太郎氏が調査報告されたF地点註1（7次・9次調査地から北へ約50m地点）も同じような堆積状態で遺物などは検出されていない。そのかわりにE地点註2では（G地点より北へ20m）かなりまとまった土器が検出されているためE地点と7次・9次調査地区南側は微高地的な場所と考えられる。そのため7次・9次調査区南側に遺構が集中している可能性があるため、今後この地域を調査をする場合、これらを十分検討し考えていく必要があると思われる。

註1・註2 奈良県史跡名勝天然記念物調査会第拾回報告

「高市郡新沢大字一石器時代遺跡調査」 吉田宇太郎著 1925